なんちゃってエンコー生 作=かねたたき



第 1 章

「ねえ、先にちょうだい」

いに彼の顔を見る。 んとタマタマが現れた。左手でおちんちんをさすりながら、右手でタマタマをなでる。上目づか ひざまずき、ベルトに手をかけた。ズボンとトランクスを一気に下ろす。目の前に彼のおちんち 「積極的なんだね」 ホテルの部屋に入ると、一緒にシャワーを浴びようという彼を制して、私は言った。彼の前に

彼は気持ちよさそうな表情。 私のなすがままにしている。

私は左手におちんちんを持ち、ゆっくりと口を近づけていく。口にくわえる寸前、右手でタマ

タマを思い切り握りしめた。

「な、なにを……」

理ないか。私は構わず右手に力を入れる。 彼は一体何が起こったのか、よくわかっていないみたい。 快感が激痛に変わったんだから、

さえつけた。彼の動きは完全に止まり、泡を吹いて倒れ込んだ。 はいないんだから。私はさらにタマタマを握っている右手に力を入れ、左手でその右手を下に押 彼は私の右手をはがそうとするが、しょせんは無駄な抵抗。 タマタマを握られて力を出せる男

取った。免許証も取っておく。老けて見えたけど26歳か。私と9つしか違わないじゃん。 大丈夫だろう。 私は念を入れて、右手につかんだタマタマを、左手の拳で4,5発殴った。これ 彼の荷物をあさる。財布の中には8万円入っていた。私はそのうち7万円を抜き でしばらくは

頂く物さえ頂けば、 もうここには用はない。私は気絶している彼を残して、ホテルの部屋を出

簡単にやっつけられるんだから、あとは私のやりたい放題。 と、男の人とホテルに行き、お金をもらう。と言っても、エンコーするわけじゃないけれどもね。 り好きじゃない。それよりももっと簡単に、お金を稼いでいる。タマタマさえ握れば、 クラスの中には、「セックスなしじゃ生きていけない」なんて言う子もいるけれども、 私の名は翔子。 都立高2年生。趣味、 ショッピング。 服や小物が大好き。お金が足りなくなる 男なんて 私はあま

前カレから別れ話を持ちかけられたときに、思わずタマタマを思い切り握りしめたんだ。 マが男の人の急所だというのは知っていたけど、まさかあんなに痛がるとは思ってもみなかった。 つからこんなことをやり始めたんだろう。前カレと別れてからだから、 1年ぐらい前 タマタ かな。

という間に気絶しちゃったの。そのとき思ったわ。何だ、男って偉そうにしてるけど、本当は弱 \otimes やめてくれーって叫んでいたけど、私も腹が立ってたから、無視して握りしめてやったら、あっ っちいじゃん、 たのは。 タマタマ握り潰したら終わりじゃんって。それからよ、 私がこの稼業(?)を始

応を見るのが楽しくてさ、 方ね。中には本当にタマタマを潰しちゃった人もいるしね。タマタマを握ったときの男の人の反 やってさ。 そうね、 中には触っただけで射精した人もいたけれど、考えてみれば、その人は運がよかった これまで100人近くを相手にしたわ。みんな期待に胸とおちんちんをふくらませち 趣味と実益を兼ねているわけ。

- 4 -

ない。中身が見られるわけじゃないし。それにこのミニスカートも、 日も駅の階段で、 今日もそうだけれど、 私の後ろにいたサラリーマンからお金を稼いだ。 私は思いきりミニにした制服を着ている。別にパンツが見えても気にし お金を稼ぐ道具なんだ。昨

「ちょっと、今かがんでスカートの中を覗いてたでしょ!」

「何を言ってるんだ、そんなことはしていない」

別に本当にかがんでいたわけじゃない。 ただたまたま私の後ろを歩いていただけ

「何よ、スケベ!言い逃れようったって、そうはさせないからね!」

私はサラリーマンのネクタイを掴んだ。

「さあ、駅長室に行きましょう」

「何をする、放せ!」

絞まるはずだ。サラリーマンの表情が変わる。ネクタイから逃れようと、首に意識が集中してい 抗は終わり。こんなことで死ぬほど苦しむなんて、本当に男の人って不便ね サラリーマンは私を振り払おうとした。私はネクタイの細い方だけを引っ張った。これで首が その瞬間を狙って、私はタマタマを膝で思い切り蹴り上げた。もうこれでサラリーマンの抵

財布ごとあげるから許してくれって? そうまで言うんじゃ仕方ないわね」 お金をあげるから、駅長室に連れて行くのはやめてって? 虫のいいこと言わないでよ

「これだけでいいわ。あとは返してあげる。もう二度と覗きなんかするんじゃないわよ」 私は勝手に一人で話を進めて、サラリーマンの財布を取った。お札だけを抜き取る。

数日後、今日も私は男の人とホテルに来ていた。

「ねえ、先にちょうだい」

たいた。私はベッドの上に吹っ飛んだ。 いつものようにそう言って、ベルトに手をかけようとしたそのとき、 男の人は私の頬をひっぱ

「何をするのよ!」

私は男の人を睨みつけた。

「5日前はこいつが世話になったらしいな」

男の人の後ろに、この間ホテルで7万円頂いた男が立っていた。

言って』って。 ない。それにお金をもらうときにちゃんと断ったわよ。『お金もらっていい? 駄目なら駄目と 「盗んだ? 「こいつは俺の小学校時代からの友達だ。こいつの財布から盗んだお金、返してもらおうか」 人聞きの悪いこと言わないでよ。この人、エッチの最中に勝手に寝ちゃったんじゃ 駄目と言わなかったからもらっただけよ」

うるさい! おまえのような女には教育が必要だな」

きい。私もこれまでに100本近くのおちんちんを見てきたけれど、そのどれよりも大きい。 そう言って男の人は服を脱いだ。何? あのおちんちん、すごくでこぼこしている。それに大

- 6 -

「この真珠入りのモノでヒーヒー言わせてやるぜ」

さえつけている。下半身も男の人に固定されて身動きがとれない。男の人は片手で私の両手を押 で気を抜いたらやられてしまう。 さえつけると、もう一方の手で私のパンツをずり下ろそうとした。しかし私も必死に抵抗する。 「いい加減におとなしくしろ!」 そう言うと男の人は私にのしかかってきた。私は抵抗しようとしたが、男の人は私の両手を押 男の人は私の頬を殴りつけた。頭がくらくらする。 しかしここ

「ぶっ殺されたいのか! この野郎!」

男の人は私の目の前に顔を近づけて言った。 チャンス! 私は男の人の鼻に噛みついた。

「うわ、この野郎!」

耳を思 男の人は両手で私の顔を押しのけようとする。 い切りひっぱたいた。 その隙に両手が自由になった私は、 男の人の両

「ギャー!」

この間の痛みを思い出したのだろう。 い切り蹴り上げた。これでこの男の人はしばらくは動けないわ。私はもう一人の男の人に近づく。 男の人は耳を押さえてうずくまった。 男の人はおびえた表情をしている。 私は男の人の背後に回り込むと、 後ろからタマタマを思

「あら、ちゃんとついてたみたいね。でも、 「人に頼らずに自分で何とかできないの? それでも男? そう言って私はタマタマを思い切り蹴り上げた。男の人は股間を押さえてうずくまった。 あなたみたいな人に、タマタマは必要ないわ。 タマタマついてるの?」 タマ

びつけた。 私はカラオケ用の マイクの コ ・ドでその男の人のタマタマの根元をしっかりと縛り、 ・アに結

抜きにしてあげる」

あげるからね」 「誰かがこのド アを開けたら、 あなたのタマタマはおしまい ょ。 部屋から出るときに細工をして

私は最初の耳を押さえてうずくまっている男の人に近づいた。半分気を失いかけている。

してあげるわ」 り潰したタマの数だって、 「逃がさないわよ。私はこれまで何十人もの男の人をタマ握りでやっつけているんだからね。握 「耳が痛いんでしょうけれど、 そう言って私は男の人のタマタマをしっかりと握りしめた。男の人はビクンと体を震わせた。 5個や10個じゃ済まないんだから。あなたのタマタマ、 もっと痛くしてあげるわね。男の人の一番痛がるところを」 2個とも潰

ら放そうとする。 私はじわじわと両手に力を入れる。 男の 人はもがき苦しみながら、 何とか私の手をタマタマ

タマを攻められたらどうしようもないでしょ。これまで女の子にタマタマを攻撃されたことがな 大好きなのよ。 かったのかな? 「無理無理。タマタマを握られて勝てるとでも思ってるの? 私と出会ったのがあなたの不幸ね」 私はね、 力の強い男の人のタマタマを痛めつけて、 男の 人の方が力が強くても、 苦しん でいる姿を見るのが

- 8 -

とも潰してやった。男の人は全身の力が抜けたように、 私は渾身の力を込めてタマタマを握りしめた。両手に潰れる感触が伝わってきた。 へなへなと崩れ落ちた。 うん、

これからはただおしっこをするためだけの道具になっちゃったわね」 「私をヒー ヒー言わせようとしてたくせに、このざまじゃあね。自慢の真珠入りのおちんちんも

私は2人の男の人の財布から現金を全て抜き取った。

「いつもは少しは残しておくんだけれども、 あなた達にはその価値はないわ」

蹴り上げた。 私は部屋から出て行く前に、マイクのコードで縛った男の人のタマタマを、もう一度思い そして花瓶を割ると、破片をサイドボードの上に置き、もう1本のマイクのコー 切り ド

の破片をタマタマの上に落とすわ。無事だといいわね、 「これでドアが開くと、1本のコードがあなたのタマタマを締め上げ、 あなたのタマタマ」 もう1本の コー ドが 花瓶

私は笑いながらホテルの部屋を出た。

第 2 音

なればいらないのに。ああユーウツ。 たんだもん。 今日は朝から機嫌が悪い。 今日は呼び出されるだろうな。 昨日、数学の補習をサボってしまった。だって、仕事(?)が入っ このままじゃ赤点は確実。 数学なんてどうせ3年に

駅に止まるたびに乗客が増え、 ボンのファスナーを下ろし、おちんちんを取り出した。そのサラリーマン、驚いた顔をしている。 今日も電車はすし詰め状態。機嫌が悪い私はわざと30ぐらいのサラリ 私はサラリー -マンに密着する形になった。 ーマンの正面に乗った。 私はサラリ ーマンのズ

ドクドクと脈打っている。私はおちんちんから手を放し、 気にせず私はおちんちんをこすった。私の手の中でおちんちんが大きくなっていくのがわかる。 してサラリー マンの耳元に顔を近づけ、囁いた。 タマタマをズボンの上から握った。そ

言うことを信じるわ」 「声を出さない方がいいわよ。この状況で私が『この人、 痴漢です』って言ったら、 みんな私の

サラリーマンはがくがく震えながら、脂汗を浮かべている。

私はタマタマを握っている右手に、少し力を入れた。

「さあ、このままタマタマを握り潰しちゃおうかなあ?きっと痛いだろうなあ」

や、やめてくれ。な、何でもするから」

- 10 -

サラリーマンはやっとの事で、声を絞り出した。

「そう、じゃあお金ちょうだい。いくらくれる?」

「ご、五千円」

「ふうん、あなたのタマタマの価値は、 五千円しかないの? じゃあいい わ。 このまま握り潰し

てあげる」

らい痛いのかは、 私はさらに右手に力を入れる。 私にはわからないけどね。 サラリーマンは必死に苦痛に耐えているようだ。 まあ、

わ、わかった、一万円出す」

「それじゃあ、このまま二度とエッチできないようにしてあげるわ」

私は右手に渾身の力を込めた。

入れなさい」 「さあ、どうする? このままタマタマ潰される道を選ぶ? それが嫌なら財布ごと、 私の鞄に

状態だろう。 サラリーマンは顔面蒼白になっている。 満員の乗客がいなければ、 立っていることもできない

「女の子にタマタマを握り潰されて男としての機能を失うのって、どんな気持ちなんだろうなあ?

なかなか人が味わえないことを体験できて、よかったわね」

「ま、待ってくれ。わかった、わかったから」

した。 サラリーマンは自分の鞄から財布を取り出し、 私の鞄に入れた。 私はようやくタマタマを解放

「ありがと。またいつか会いましょうね。バイバイ」

白目をむいて気絶した。 私は電車から降り際に、サラリーマンのタマタマを下から叩いた。サラリーマンは立ったまま、

ませんか?」 「村山先生、 昨日は補習に出席できなくてすみませんでした。 代わりに今日、 補習していただけ

学校に着くと私はその足で職員室に行き、数学の村山先生に言った。

「島内君か。今日だね。部活があるが……まあいいだろう。放課後、学習室に来なさい」

「はい、ありがとうございます」

これでよし。もちろん私は、数学なんか勉強する気はないけれどもね

「それじゃ今から補習を始める」

放課後、学習室に行くと、村山先生はもう来ていた。

これからどうなるかも知らないで。

私一人を相手に補習が始まった。 しかし私に数学がわかるわけがない。 先生の言っていること

か、どこか他の国の言葉に聞こえる。

「どうした、全然ノートを取っていないじゃないか」

先生は私の横に立った。

「だって、全然わからないんです」

私は目に涙を浮かべて、先生の顔を見上げた。

「先生は、私のことが嫌いなんですか?」

い、いきなり何を言い出すんだ。嫌いなわけないだろ」

村山先生、明らかに動揺している。柔道四段の猛者も、 この顔だと女性に言い寄られた経験は

あまりないだろう。

「じゃあ、 私のこと、好きですか?」

「そりゃ好きさ。どの生徒もみんな好きだよ」

「そういう意味で言っているんじゃないんです。 女として、 私には魅力はないですか?」

「いや、それは、その……」

私は先生の前にひざまずき、 ズボンとパンツを下ろした。

「な、何をするんだ、島内君、 やめたまえ」

しかし私は先生のおちんちんを右手で握った。

「先生はこういうの、嫌いですか?」

そのままおちんちんをこする。先生のおちんちん、 私の手の中で硬くなった。

「やめないか!」

り出した。 先生は私を突き飛ばした。 理性の方が勝ったのだろう。 私はポケットから素早くケー

「いいかげんにしろ!」

先生は下半身裸のまま、 私に叫んだ。 私はその姿をケ

「さあ、この動画をメールで送ったら、どうなるかなぁ?『先生が私を襲おうとした証拠です』

・タイで撮影した。

ボッキしたおちんちんもはっきり写ってるし、 誰も疑わないわね」

「馬鹿な、

「取れるもんなら取ってみなさい」

なぜ私の方がはるかに背が低いのに、頭の上にケータイを持ってきたのか。 上に向けるため! 私は頭の上で、ケータイをひらひらさせた。先生は私に近づくと、 ケータイを取ろうとした。 それは先生の意識を

「おあいにくさま!」

私は膝で思いきり先生のタマタマを蹴り上げた。

「ぐっ……」

先生は股間を押さえて転げ回った。

「キャハハハハ!」

股間を蹴られた男の人の姿って、なんて無様なんだろう。村山先生みたいな筋骨隆々な男の人

私の蹴り一発で死ぬほどの苦しみを味わっている。 うん、 いつ見てもい いもんだ。 そうだ、

この姿も撮影しておこう。

「先生、どうしたの? そんなに苦しんじゃって。まさか女の子にタマタマを蹴られるなんて、

考えもしなかったの?」

「な、何てことしやがる……!」

男の人が、 「みみふ。 私はそうやって苦しんでいる男の人を見るのが大好きなのよ。 タマタマをやられて苦しんでいる姿がね」 特に先生みたいに強い

私は先生の手を股間から振り払い、両手でタマタマをしっかりと掴んだ。

女の子にタマタマを握られただけで、全く無力になるんだから」 「男の人がいくら努力しても、タマタマを鍛えることはできないからね。柔道四段の腕前でも、

そういうと私は、タマタマを握っている両手に少し力を入れた。

「や、やめてくれ!」

「そうね、じゃあ取引しない? 条件は2つ。まず1つめは、私を絶対に赤点にしないこと」

「わ、わかった」

「来年も先生の授業を取るから、卒業するまでずっとよ」

「や、約束する」

「もう1つ。先生、給料日はいつ?」

「に、25日だが」

「そう、じゃあ私が卒業するまで、

毎月25日に10万円ちょうだい」

「 え ? そ、そんな……」

「まさか嫌だとは言わないわよね」

私は両手にさらに力を入れた。

も20代の若さで、二度と射精できなくなるのは嫌でしょう?」

「そんなことを言うと、タマタマ潰しちゃうわよ。それにさっきの動画もばらまくからね。

「わ、わかった、 わかったからやめてくれ!」

上げるからね。よけたりしたら、教師生命も男としての人生も終わりだと覚悟しておきなさい」 「そう、物分かりがいいわね。じゃあ約束よ。 お金は1日遅れるたびに、タマタマを10発蹴り

私は股間を押さえてのたうち回っている先生を残して、学習室を出た。